

鶴子銀山(15) 変貌する村々

鶴子銀山の開発は、そのふもとにあった村々を大きく変えました。沢根から五十里にかけて、銀山への諸資材を積んだ廻船があふれ、これらをあつかう問屋や、銀山稼ぎの人々を相手に市が建ち並び、次第に町並が広がっていきました。

史料によると、慶長3(1598)年に沢根町ができたとあり(一説に慶長元年とも)、鶴子銀山に坑道掘りが本格的に導入された時期に重なります。

この年には、沢根の甚助という廻船主が、伏見城作事御用材である厚さ5寸・長さ2間の板50枚を、秋田から敦賀まで運んでいます。このほか、大船屋半右衛門など有力な廻船商人が、沢根を中心に活躍していました。

慶長5(1600)年、窪田と五十里の村境を流れる荒町川河口に湊が開かれ、外海府などから金銀製錬に必要な炭が大量に陸揚げされました。これが、五十里炭屋町となります。翌年、ここに十分の一の税を徴収する番所がおかれました。

ところが、沢根湊の方が、「深さ五

尋、海底砂、船六、七十艘掛かる。西風は余程大風にても当たらず、北南も大体は当たらず、東風のみ悪し」(『佐渡国雑誌』)と条件がよく、多くの廻船が集まるようになりました。そのため、沢根の北側の海岸には、大小廻船の船引場が設けられました。ここは「七場」と呼ばれ、のちに「質場」と表記されるようになりました。沢根町には、番所や役宅、問屋が次々とおかれ、ますます活況を呈するようになりました。



和船が停泊している沢根湊(明治末頃)

産業観光部世界遺産推進課

63-5136



佐渡ジオパーク

ジオパーク、推進日記

ジオパークでつながりを生み出そう

8月24日、市民の皆さまをはじめ、ジオガイド、佐渡ジオパーク推進協議会関係者、新潟大学関係者など27人が集まり、『佐渡において解決したい課題は何か?』について、グループでの情報共有を行いました。

ペアでの意見交換では、雇用や交通マナー、後継者不足など、たくさん課題が浮かび上がり、これらの課題に対し、ジオパークをどのように活用すると解決するのかを今後とも考え続けていく必要があります。

ジオパーク最大の特徴は、ネットワークを持つことです。ネットワークを持つジオパークは、全国の仲間とつながり、お互いを応援し、悩みを共有することができます。

このネットワークが広がると、交流が生まれ、つながりが形成されていきます。このつながりこそが、佐渡の課題解決に向けての第一歩なのではないでしょうか。

参加者からは「じっくり佐渡の課題について考えることができた」、

「ジオパークだけではないネットワークが佐渡を覆ってほしい」という意見が聞かれました。

今後ともワークショップを開催し、みんなで『佐渡ジオパーク』を作っていくしますので、皆さまの声を届けてください。

教育委員会社会教育課

ジオパーク推進室

(畑野行政サービスセンター内)

66-4160



意見を出し合い、みんなで課題を共有

